

● シリーズ「私の見た日本」Vol.240

中国と日本の日常美学の違い

王 嘉路(ワン ジャル)

中国・モンゴル自治区バヤンノール市生まれ。2023年天津大学建築学院建築学専攻卒業。2024年4月より東北大大学院入学、現在工学研究科 都市・建築学専攻修士課程に在籍。



大学で建築を選んだことをきっかけに、私の「美」に対する感度は徐々に研ぎ澄まされていました。美しいものを見たいという願いは次第に強まり、世界各地の「美」を実際に見て回りたいという思いに至ります。そして私は「まずは日本から」と考え、世界という書物の序章をめぐるようにして、日本への扉を開きました。2023年7月、期待を抱いてこの地に降り立つてから、すでに日本での生活は2年を超えていました。

この間、私は「美」への関心を止めることはありませんでした。もちろん建築巡りやデザイン展、アート展も重要な経験でしたが、より多くの時間は、日常そのものの審美体系に身を置くことでした。

私にとって「日常審美」とは、生活の細部に浸透した視覚と感覚の慣習を指し、街区の風景、店舗の陳列、公共設備、交通標識などの要素を含みます。それは住民の習慣や業界の慣行、政策や規制、経済的な力学など、複数の要因が相互に作用して形づくられます。日本の日常的な審美体系に順応し、それを理解していく過程で、私自身の「美」に対する感度は学びと観察を通して高まってきました。したがつ

て再び中国に戻ったとき、中国の日常審美のなかにある「美しさが足りない」と感じる部分を、以前よりもずっと実感するようになったのです。本稿ではその実感を出発点として、中国の日常審美の差異について簡潔に比較・考察してみたいと思います。

その差異意識は、特に今年の夏に鮮明になりました。これまで私は飛行機で直行し、四時間ほどで中国に戻ることが多かったため、両者の違いを一時的に忘れてしまっていたかもしれません。しかし今年の夏、私はまず日本から香港へ短期滞在し、そこから高速鉄道で中国大陸に戻りました。香港の日常審美の印象がまだ鮮明に残っているうちに、わずか十数分の高速鉄道で別の視覚世界に連れ戻されたのです。「やはり違うなあ」と思い、日本の街角の光景が鮮やかに蘇りました。

基礎的なシステムの秩序

日本の日常審美は、もっとも基礎的な公共要素を土台としています。ナンバープレートや公共標識、案内システムに至るまで、フォントから配色に至る細部が入念にデザインされ、統一されたデザインランゲージを持っていま

す。それらは簡潔で自制が利いており、効率的で曖昧さのない情報伝達を前提としながら、理性的な美しさを備えています。

これに対して中国の基礎的要素の視覚的構成は、散発的で秩序を欠いているように見えます。ナンバープレートの配色や書体は、国民の審美意識が高まるなかで繰り返し議論や批判の対象となってきましたし、案内システムにおいては各地で独自に作られた標識が基準を統一しておらず、統一的なデザインランゲージを形成できていないという問題もあります。最も基本的な視覚要素が混乱に陥ると、その上に築かれる視覚環境全体を調和のとれたものとして成立させることは難しくなります。

商業表現の違い

日本の商業景観は中国とは異なる顔つきをしており、全体として「内向きの調和」を表現していることが多いです。店舗の看板に用いられるフォントや素材の選定は店舗の性格と緊密に結びつき、街区全体の雰囲気との整合性を慎重に考慮してつくられます。彼らが追求するのは、個々が絶対的に目立つことではなく、集団のなかでほどよく自己を示すことです。



左／中国の案内システム 右上／中国の商業看板



左／中国の商業看板 右下／規格化された看板



中国の都市公園夜景

これに対し中国の商業看板では、美的配慮が後回しにされ、目立つか否かが重要な基準になることが少なくありません。その結果、ある商業地区では視覚的過負荷が生じます。しかも、この混乱を是正しようとする行政介入が別の極端に至ることもあります。サイズや地色、フォントの統一といった手段で通りの看板を一律に「規格化」することは、一見すると整理されたように見えても、むしろ商業の個性や街区固有の活力を奪い、美的向上にもつながらないことが多いのです。

この審美ロジックの違いは、都市の夜景形成にも現れます。日本では建物の「内側からの光」やスケールの小さな照明を活かす傾向があり、光は柔らかく節度ある使われ方をします。ファサードに派手な色彩を多用せず、窓辺の灯りや温かな街灯、目立ちすぎない誘導光で雰囲気を作成します。対照的に中国の都市夜景はネオンやLED幕壁、大規模な投光を用い、色彩は飽和しコントラストも強く、視覚的インパクトと夜間の目立ちやすさを強調します。これは経済活力を示す手段として有効ではあるものの、光害や視覚的過負荷を招き、街区の身体的なスケール感を損なう側面もあります。

自然と歴史の「対話」と「征服」

日本の自然景勝地では、人工施設の存在感を極力抑えることが志向されます。登山道や案内板、休憩舎などは原生の素材を用いるよう努め、その設計哲学は自然と「対話」しようという姿勢にあります——自然を征服するのではなく、寄り添うことを優先するのです。

一方で中国の景区開発には「征服的」な発想が入り込みやすく、広い階段や展望プラットフォーム、誇張された景観構造など、大きなスケールと人工の痕跡によって自然のスケールを書き換えてしまいます。その代償として、景観の核である野趣や静謐さ、本来的な美し

さが失われることが少なくありません。この違いは歴史的街区でも際立ちます。日本は「在地性」を尊重した保存や「活性化」の手法を探る傾向があり、修復に際しては元の建物のスケールや素材感、経年の痕跡を可能限り残します。商業活動も歴史の肌理に慎重に組み込まれ、重視されるのは場の精神の継承と住民の生活のリアリティです。

対照的に中国の歴史街区は、観光開発や地域経済の要請に直面すると「商業化」と「標準化パッケージ」を組み合わせることがある。統一された店構え、統一的な舗装、商業配置などは短期的に識別性と観光受け入れ能力を高めますが、結果として各地にあるはずの「歴史的景観」が均質化してしまう危険を孕んでいます。

こうした違いが生まれた理由

・近代化の時期と進め方：日本の近代化は比較的早く、戦後の高度経済成長期には、効率性や機能性の追求と並行して、近代性に相応しい審美規範が意識的に整備されており、その審美体系は比較的長い時間をかけて漸進的に内面化されてきました。

これに対して中国の近代化、特に都市化は

ここ数十年で驚異的な速度と規模で進みました。

この「コンパクト近代化」はまず、機能性と規

模の確保を優先し、「美」という細やかな公共財の体系的構築は基礎整備に比べて後回しになりました。発展の重心が「有無」から「優劣」へと移るにつれて、初期に見過ごされた審美上の課題が顕在化してきたのです。

・審美教育の普及と公共意識の成熟度：日本では初等教育から造形感覚や美感の涵養が重視され、良いデザインとは何かについての社会的合意が比較的高い水準で保たれてきました。成熟した市民社会と長年にわたる公共的生活が相まって、公共空間の質に対する自発的な要求や監視の意識も育まれてきました。これに比べると、中国では体系的に大衆を対象とした審美教育が長らく不足していました。近年、国民の審美意識は目覚めつつあるものの、それが普遍的で成熟した公共参加の意識へと完全に転化しているわけではありません。何が「美」であるかという社会的合意はまだ形成途上にあり、「公共環境の美を誰が担うべきか」といった認識もいまだ曖昧さを残しています。

このように、日本と中国の日常美学の差異は、単なる趣味や好みの違いではなく、両国の近代化の歩み方、社会構造、そして人々の公共意識の成熟度といった、より深い部分に根差しています。中国がその膨大な活力を、量から質へ、速度から深みへと転換していく過程で、日常の美に対する意識もまた、必ずや新たな段階へと向かっていくことでしょう。その道筋を探るうえで、日本のように、伝統と現代、規律と個性のバランスを、政策と市民の協働によってどのように構築してきたかは、一つの手がかりを示しています。



左／中国の歴史街区



右／日本の歴史街区